

江戸の名物・名産と江東地域⑥

江東の流通と名物・名産

江東区深川江戸資料館

江戸で生まれた名物・名産と江東地域の発展をテーマに展開してきたシリーズの最終回です。今回は江東地域が江戸の経済や名物・名産を生み出すのに、どのような役割を果たしてきたのかを考えてみましょう。

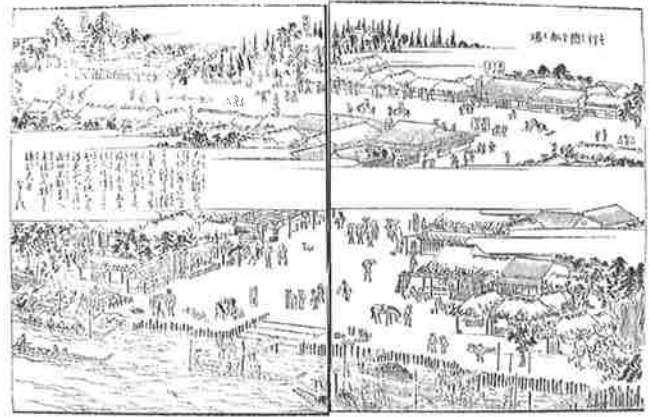
1. 江東地域の市場・蔵の町

資料館ノート第77号の「江戸湊・隅田川と名物」では、徳川家康の江戸入府と同時に城下町の建設が始められ、本町の通りが開かれ、隅田川付近には江戸湊の役割を担う町が作られていったことを述べました。江戸幕府の成立以後、江戸の機能が拡大し、市街地も周囲に広がるにつれて物資を保管する、倉庫の役割が深川に求められて開発が進められました。

江戸初期の年代記的随筆として知られる『玉露叢』(著者不明)には明暦の大火(1657年)後の深川の蔵に雑穀などが買い置きされており、それを幕府が取り調べて、持ち主がわからない雑穀類について列挙しています。米15万1200俵余、大豆1万8000俵余、大麦1万5000俵余、小麦1万2000俵、下り酒4万樽余、塩3万8600俵余など、米をはじめ相当数の雑穀類が、所有者不明の状態で見捨てられていたこととなります。米の15万俵は15万石の中規模より上の藩の1年間の年貢収入高にも匹敵するほどの分量です。

また武州川越の商人、榎本弥左衛門が書き残した『榎本弥左衛門覚書』(平凡社東洋文庫)では、延宝8年(1680)8月に江戸は大風雨に見舞われ、大勢の溺死者まで出るほどでしたが、その時弥左衛門は江戸の消息として米が品薄になり、米価が高騰していく様子を書き留めています。公儀(幕府)より日本橋本町にあった米河岸や深川の蔵、さらに江戸中の河岸通りの蔵を点検し、米・餅米・大豆・大麦などがどのくらい残っているのか、隠されていないかなどを厳しく調べたことが記され、米については深川の蔵に8700俵余、餅米は同じく2400俵余、大豆は8400俵余などの穀類が収められていたと記しています。深川のほかに挙げられているのは、大店がひしめく日本橋本町に近い伊勢町の河岸だけで、深川はすでに、江戸初期の段階で商人による蔵が相当に建てられており、江戸を代表する「蔵の町」に成長していたことがわかります。

17世紀にははやくも仙台藩や尾張藩などが深川に蔵屋敷を設けていたことが知られており、やがて八戸・南部・相馬・米沢など東北方面の諸藩も舟運により物資



『江戸名所図会 行徳船場』(長谷川雪旦画 天保7年・1836)
行徳には関東・東北からの物資が集められ、小名木川を経て江戸へ送られる輸送システムが作られました。

の廻送が可能になってきた深川へ蔵屋敷を設けるようになりました。

2. 江戸問屋の動き

深川が蔵の町として成長していた頃、江戸の問屋にも新たな動きが見えました。江戸で大店といわれる商人は、その出身は近江(滋賀県)・伊勢(三重県)などの上方からの商人が多く、先進地域だった京・大坂からの「下り荷物」を扱う問屋が有力問屋でした。これらの問屋が取扱い商品や店の所在地などにより組合を作り、10組の問屋仲間が作られました。これが江戸十組問屋で、上方と江戸を東海道沖の海運で結び、江戸問屋が上方からの商品の荷受をしてこれを江戸で販売する仕組みを作り上げました。

しかし、江戸中期の天明の飢饉(1780年代)を経て、荒廃した関東の農村が復興し、村方でも加工品の生産が始まると、農村をめぐって製品を買い集め、江戸や城下町の問屋に売る仲買商の動きが活発になり、江戸の問屋による経済支配が動揺し始めました。

そこで、文化6年(1809)には江戸の問屋が隅田川に架かる橋のうち、吾妻橋・新大橋・永代橋の架け替えを請け負う代わりに江戸問屋の特権を認めもらうための機関として、三橋会所を設立しました。この会所の設立には頭取(代表)になった飛脚問屋大坂屋の杉本茂十郎が奔走したことが知られています。この時期の江戸問屋は、幕府の米価調節にも協力し、米価を上げるために何万石もの米を買わせられるなど、問屋にとって



『名所江戸百景 中川口』(歌川広重画 安政4年・1857) 左下に中川番所が描かれて、中央の左右を流れる中川に筏が浮かんでいます。関東の産地で切り出された材木でしようか。旧来の熊野・木曾方面からの材木とは違った、新たな流通の動きがうかがえます。

は負担が大きく、批判もでてきました。

それでも文化10年(1813)には江戸十組問屋は65組、1271軒が加盟する、大経済団体となって、扱ひ商品別の組ごとに株数が定められ、それ以外の問屋の商いを禁じ、特権化が図られました。株仲間の公認です。ことに真綿、麻、錫、鉛などを商う問屋で、従来から経営基盤の弱い問屋層がこうした動きの中心にいました。これには商人の中には農村を回って集荷する在方商人の活動をも江戸問屋が支配しようとの意図がうかがえます。

しかし文政2年(1819)には三橋会所は株仲間内からの反発や頭取杉本茂十郎の強引な運営などが露見し、解散となりました。さらに天保12年(1841)の天保改革では株仲間が不正に物価を吊り上げているとの認識から、株仲間解散令が断行されました。

迷走するかのような幕府と江戸問屋の関係ですが、これも上方と江戸の流通だけを押さえていれば、商品流通・経済を押さえられる時代が終わっていることを示しています。こうした新たな動きを作りだした要因に江戸地廻り経済の成長があります。関東全域に及ぶ商品生産の展開が、仲買商人や在方商人といった商人を成長させ、江戸問屋を通さない取引も横行するようになりました。武州木綿はその典型で、大伝馬町などの木綿問屋が仲間以外の木綿商人の活動を取り締まるよう、幕府に願い出ています。

3. 蔵の町から取引の町へ

～米穀・干鰯・材木～

深川が蔵の町から取引の町へと、江戸市場を担う地域へと発展するには、米穀・干鰯・材木といった当時の主要品目を貯蔵し、取引する場所が作られたことが大きな要因になっています。

米については「米将軍」といわれた米価政策で知られる8代将軍徳川吉宗の享保改革の時代に問屋仲間の組織化が図られました。幕府の直轄領から江戸に送られてくる年貢米は、浅草米蔵に収められて、江戸に住む旗本・御家人への扶持米となり札差商人が管理していました。また諸藩からも年貢米がそれぞれの城下町だけでは売却・換金しきれないため、大都市江戸へ廻米されました。諸藩の蔵屋敷が多かった深川には多くの米が集められ、米問屋によって取引されました。

干鰯は銚子沖などで取れた鰯を油抜きした畑の肥料です。初めは日本橋小網町や茅場町などで取引されていましたが、元禄9年(1696)に海辺大工町(現白河)に銚子場と呼ばれる干鰯の取引所ができてから、深川には4ヶ所もの取引所が設けられました。干鰯を扱う問屋も日本橋周辺から次第に深川へと移ってきます。元禄9年には干鰯問屋9軒中深川の問屋は皆無でしたが、幕末の嘉永4年(1851)には15軒中11軒が深川で営業しています。

材木は元禄14年(1701)の木場成立以来、深川を代表する品目です。しかし、当初の材木問屋は日本橋西河岸、本八町堀、霊巖島などに本店がある問屋が大半でした。深川木場材木問屋仲間を例に取れば、延享元年(1744)には11軒中深川在住の問屋は5軒でしたが幕末の嘉永4年(1851)には9軒中8軒までが深川在住に変わっています。さらに大きな変化として、材木産地として知られた紀州熊野や木曾からの入荷以外に、関東一円からの川船による入荷が増加し、これを扱う川辺材木問屋などに加入している商人が、旧来からの材木問屋に対抗するようになりました。

関東の河川整備が進むにつれて、江戸への材木の移送も可能になったことから、各河川の河岸を通じて、やがて中川などから小名木川へ入り江東地域へと運ばれて、木場に収められました。これも江東地域の掘割網の存在が作用しています。

こうした大量の物資を扱う問屋が深川で営業し、また問屋仲間による流通システムも作られていくと、江戸初期から中期にかけて設定された、幕府から保護されてきた上方との結びつきが強い旧来からの問屋の支配だけでは、江戸の経済は把握できなくなります。むしろ地方で活躍する在方商人や、新興の問屋商人の存在が大きくなって、その活躍の場が深川であったとさえ感じられるほど、深川は「蔵の町」だけでなく、「取引の町」へと発展していきました。それは同時に、江戸の名物・名産を生み出す場としての深川へと成長したことを意味しています。醤油や塩、味噌などの主要商品も同様に深川に入りやすい環境が作られていきます。

このような状況がさらに深まりながら、深川は明治以降もその役割を担い続けます。明治19年(1886)米の取引の混乱を解消するために、深川正米市場が佐賀町に開設されたのもこうした事情によっています。